



子供たちを私のもとへ来させなさい

Viator

VOL.005

HAPPY EASTER !!

主任司祭 イブ ボアベール

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。
神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、
御子によって世が救われるためである。 ヨハネ 3：16-17

主のご復活おめでとうございます。

ご復活こそはキリスト教信仰の要であり、希望そのものです。

イエスは公生活において、教えること、罪を赦すこと、神に捧げることの祭司職を果たしました。

それまでのすべての祭司にまさる新しい祭司として、最後の晩餐を執り行われ、この世で初めてのミサを捧げられました。そのいけにえの夕食において神との新しい契約を宣言し、イエスご自身という完全ないけにえを捧げることによって、私たちのために永遠の救いを成し遂げられたのです。

今日私たちがごミサを捧げるたびに、それは現存します。神にとってそれはいつも今この時、決して過去の出来事などではありません。それを通して永遠の命を生きるという大きな希望が与えられます。旧約時代いけにえとは、人が神の赦し、神の恩恵を求め、神への感謝、賞賛、崇拝を捧げるためのものであり、神を絶対に認めることを表すのにふさわしいやり方、例えば捧げものを殺すなどして捧げられました。

イエスが捧げたいけにえは彼ご自身であり、そのすべての愛と従順、御身体、御血でした。祭司として喜んでご自身を真のいけにえとして与えられたのです。この真の「神の子羊」が私たちのための犠牲として捧げられた時に私たちは贖

われたのです。旧約時代、モーセはイスラエルの民を救い、奴隷状態から解放しました。その記念が過ぎ越しの祭りです。そしてイエスはご受難によって、世の初めから終わりまでの全ての人々を罪から救いました。ご受難は、イエスの愛による人間の罪の償い、神と人との和解でした。罪によって造られたあらゆる分裂と敵意が癒されたのです。

神はすべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。

神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、
人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。

この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。テモテ I 2:46

私たちがその救いに与るために、もっとも大切なのは毎日の祈りです。神は人に自由意思をお与えになりました。私たちはその自由を使って神に応えねばなりません。今年の復活祭にあたって、前教皇ベネディクト16世は次のようにお書きになりました。

「復活は新しい創造の日です。まさしくこのためにこそ、教会はこのような日に、新しい契約をよく理解できるように、古い昔の創造のみ業についての記念から典礼を開始します。それゆえに、復活徹夜祭のみことばの典礼の始めには、世の創造の朗読があるのです。神の創造のエピソードは、いったい何を意味しているのでしょうか。創造は光から始まります。光は生命を可能にします。光は出会いを可能にします。光はコミュニケーションを可能にします。光は知識を可能にし、現実になづくこと、真理に到ることをも可能にします。知識を可能にすることによって、自由と進歩をも可能にします。神が光を創造したということは、神がこの世界を知識と真理の空間、出会いと自由の場として創ったということです。」みなさん、日々呼吸を欠かさないのと同じように、毎日祈りを欠かさないことは生きていくために必要不可欠です。祈りは愛であり信仰そのものです。キリストの光のもと、ともに歩んでいきましょう。

不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、
神は天から怒りを現されます。なぜなら、神について知りうる事柄は、
彼らにも明らかだからです。ローマ 1:18

典礼部だより

「聖体拝領」

私たちはキリスト者として歩む中で、習慣化されている信者としての所作の意味や歴史を学び、今一度、信者として、その奥儀の尊さと偉大さに触れ、私たちの信仰をより豊かなものにしていきましょう。前回の「聖水」に引き続き、今回は「聖体拝領」について掲載致します。

※カトリック大辞典より引用

キリスト者がエウカリスティア（⇒ミサ）のなかで、聖別されたパンとぶどう酒を共に食することを通して、キリストの命を分かち合うこと、パンとぶどう酒にキリストが現存すると信じられているため、それを受けることを「聖体拝領」と邦訳しているが、原語は「交わり」もしくは「分かち合い」の意。すなわち、ただ単に個々人が聖体を受けて、キリストと一致するだけでなく、キリストの命を共有することを通してより一層キリストの体としての教会の本質を実現していくことを意味している。

典礼における作法としては、すでに I コリント書 11 章 17 - 34 節に指示されている。キプリアヌスは迫害の時代に聖体拝領が信徒にとっての励ましであったことを証言している。（『背教について』26）エルサレムのキュリロスの作とされるミュスタコギアやアンブロシウスの説教『秘跡について』は、司祭が「キリストの体」と唱えながら、聖別されたパンを差し出し、これを受ける信者が「アーメン」と応答するよう教えている。

6 世紀には聖体に対する信心が発達し、聖体への畏敬から、聖体拝領に先立つ周到な準備が義務づけられるようになった。13 世紀以降、聖体拝領は、一般の信徒にはパンの形態においてのみ許されるようになったが、第 2 ヴァチカン公会議の『典礼憲章』は、ミサへのより完全な参加として聖体拝領を勧めるとともにパンとぶどう酒の両形態による拝領を「主の食卓」のより明確な表示としている。

聖体拝領は、教会に所属する者の最も親密な交わりを表明することであるため、洗礼を受けたカトリック信者のみ許されるという規定がある。また、幼児洗礼を受けた者には、分別のつく年頃になったとき教理を学んだ後に初めて聖体拝領が許される。

参考 御聖体拝領の際、神父様から御聖体を掌に頂き「アーメン」と応答した後、一步横に動いてから頂いていませんか？これは後ろの人への配慮だと思います。人への配慮より神様と自分の関係を第一に優先し、**神父様の前で拝領するように致しましょう**。そして拝領の時は、自分だけでなく、御ミサに参加できない方々のことを思い、この「よろこび」「恵み」を分け与えていただくために拝領致しましょう。宣教という大きな御奉仕（宣教は神から委ねられている）です。第二ヴァチカン公会議前は、ミサ毎に御聖体拝領はしませんでした。告解をして心身ともに潔癖でなければ、と云う考え方でした。しかし公会議後、現代の教会は「御聖体」を慈悲深いキリスト最大の贈り物として考えるようになっていきます。神の慈悲深さにすぎる前に畏敬の心を忘れないように致しましょう。

拝領の際は、左手の下に右手を添え、左掌に御聖体を受け、神父様の目前で右手で御聖体を口に運びましょう。

参考文献	ミサ（イエスを忘れないために）	ドンボスコ	御受難会司祭	国井健宏
	ミサを祝う		オリエンズ	
	ミサがわかる（仕え合う喜び）	オリエンズ		土屋吉正
	わかりやすいミサと聖体の本	女子パウロ会		白浜 満
	オリエンズ宗教研究所		御指導	
	神と共にある生活	パピルスあい		石井祥裕